



師範學校編輯小學讀本
三

ホ 2
5718
3

門ホ2
5718
3

師範學校編輯

卷三

小學讀本

明治七年
八月改正

文部省刊行



小學讀本卷之三

第一

水ハ、動物植物の養液として、地球上尤要用のものあり、水をなきときは、萬物生育をることと得ず、水ハ、止水、流水の別あり、池水、湖水と、止水といひ、河水と、流水といふ、湖水ハ、陸地、全く四面と環り、中窪なる地、停滞するなり、

田中義廉

編輯

那珂通高

校正

藤原氏子藏書

河水といへ、山間の谿谷より湧き出でて、海に注ぐをいふ、

此圖ハ、林中の湖なり、此水の陸地全く四面と圍みたるゆゑ、流れ去ることなし、

今ハ、夏日ありや、又冬日なりや、木葉の茂りたるを以て、夏日なることと知る、○然り多く木葉を、唯冬日ハ、總て木葉なきを、



松柏の類のみ、葉あり、○野草ハ、冬日も生ずるなり、○否、生ざることをし、

汝ハ、林中に鳥あり、又水中に魚ありと、思ふや、○必これあらん、唯明は見ることを得ざるのみなり、

林間ニ、湛へたる水上に、數多の水鳥ありて、游泳

せり、水鳥ハ、閑静あると好むものゆゑ、其浮べる處ハ、景色甚幽邃なり、

此圖も、亦林中の湖なり、これハ、



前より示したる圖の湖と同じきなり。○然る、同じ湖
 なれども、我が見る所は因りて、異なるなり。
 今湖上より、浮べる舟あり、舟中より、多くの人と、載せ
 うり、この人の、携へたる、長きもの、何なりや、こ
 れ、水棹にて、舟と動うた
 具なり。○此舟は、何れの方
 へ行くや、こまを、左の方
 行くなり。

此舟は、前の舟と同じきなり。
 ○否、同トからば、此舟は、前



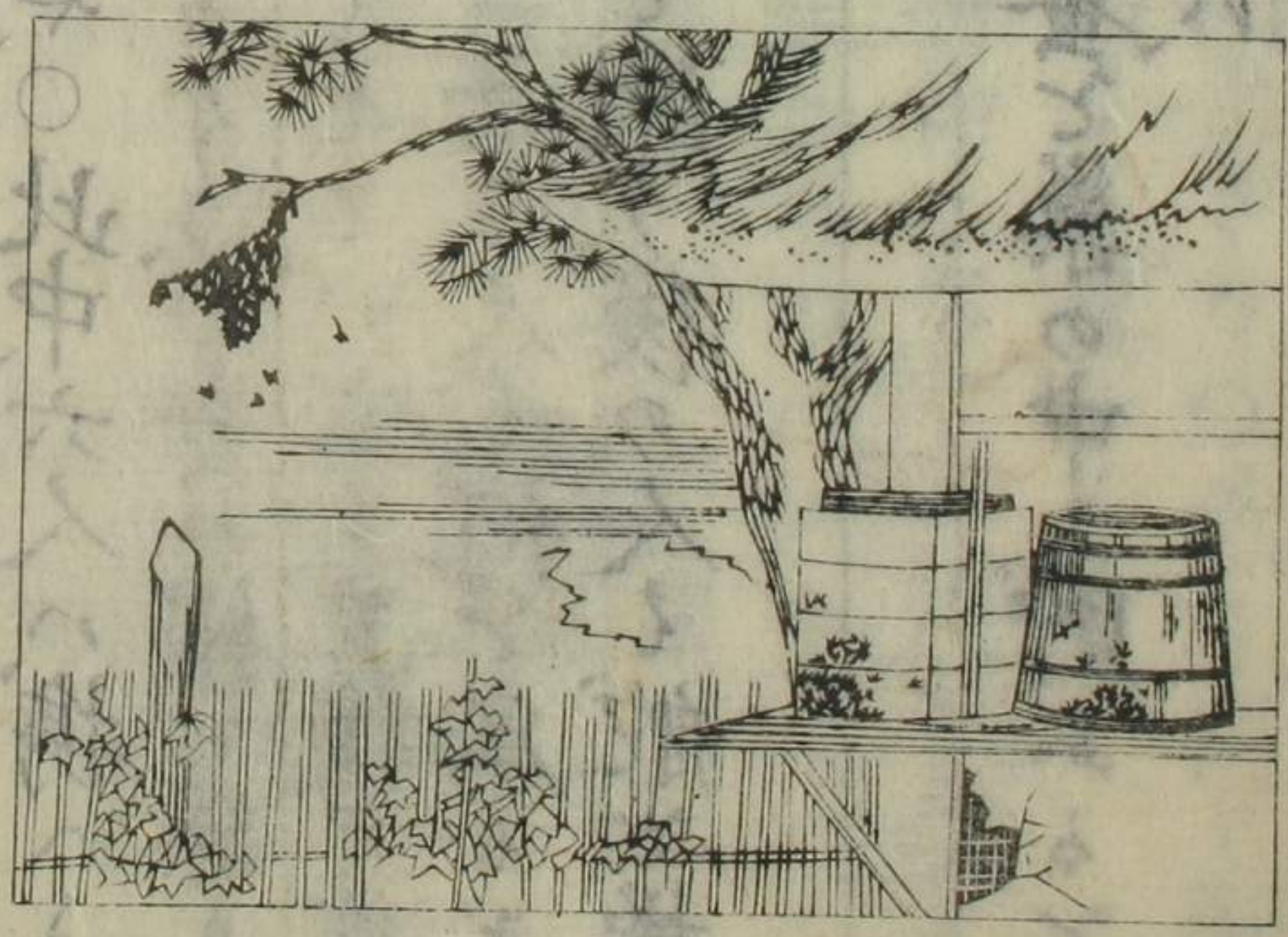
の舟より、大なる舟と、載せたる舟の中より、
 何如し、舟と進むるや。○此中、六人の、携へ
 る櫂と、操りて、舟と進むるなり。○舟は、櫂と操り
 たる人の、何れの方へ、行くぞと、いふよ、其後の方
 に行くなり、舟の、艫と、舳より居る人も、何と爲るぞ
 と、いふよ、先の人、水前と測り、後の人、舵と操
 れるなり。

第二

此圖は、蜜蜂なり、蜜蜂の、蜜と、巢の中より、貯ふる
 見よ、其勤實より、容易を知らん。

天地の間よ、生と稟けた
るものハ、蟲をらも、猶か
くの如し、况や、人と生れ
ゆる者とや、余今汝等よ、
蜜蜂の蜜と貯ふる状と、
語るべし、

此蜂よも、髮筋の如き舌
あり、此舌と花の中よ、入
きて蜜と吸取るなり、
此蜂、夏の際ハ、旭の昇ると、待ちて、巢の中より飛



出種々の花と、尋ねて、其中より力の及ぶ限りの
蜜と吸取りて、歸きり、

其際ハ、何如ある暑き日よも、怠らば、日々飛去り
てハ、飛回り、夏の永き日と、一刻の時間も徒に費
はることなく、蜜と巢の中よ、積置ゆゑよ、冬よ至り
て、一種の花無き時よも、食料よ乏しきことなり、
此蜂よハ、巢毎よ、必秀び、大なる蜂作りて、これ
と、蜂の王といふ又懶蜂とて、蜜と取らざる蜂數
頭あり、此懶蜂とハ、かの能く勤むる蜂ども、これ
と逐出だして、共よ巢の中よハ、棲まざるなり、

汝等も幼時より日々勉め勵みて、此蜂も恥ぢざ
るやう、心かくべし、もし怠惰にして、其業を勉め
ざるごとし、此懶蜂の如くあらば、必世間の人も疎
まれて、遂に與人交るものもなきに至るべし、

第三

人と交るよ、眞實と以てして、決して虚言すべ
からん。○衆人の對して、親切に交り、言へ必忠信
と、主とをる時の衆人も、亦我を愛して、其身も自
幸福と得べし、
汝は虚言の惡しきことと知まらば、○然らば、虚言

の惡しき事の屢こきと聞けり

苟虚言をる時の人皆汝と棄て、顧ざるべし、

此の如くなるらば、何と以て、身の幸福と得
べき、

自其惡しきことと知りて、虚言したる後、汝の

心は快きや、○否、快からん、

然らば、汝の心は、惡しきことと知りたらば、決し

て、これと犯すべからん、縱令人の見ざる所にて

も、常に父母教師の面前と思ひて、其行狀と慎む

べし、これと獨り慎むといふなり、

故に善良にして、正直なる兒は神の助を得て、其
 身の幸福と享ることも、疑無し、
 若又誤りて、窓と破り、書と汚し、戸の鍵と失ひ、机
 上は墨と翻せる時をど
 こ、父母教師の前に行き、
 自其始末と訴て、罪と謝
 をべし、是唯一人と欺り
 ざるのよしならん、亦自欺
 りざるあり、
 自欺りざるらん、あたと欲



せば、決して虚言をべし、只此一事の到底善
 人となるべきの道なり
 人と約して、これに背くは、不善の甚しきものな
 り、必衆人の擯斥と、免を得ば、故に、一旦約したる
 言へ、務て正實に行ふべし、苟信と、朋友は失つべし、
 縦令學術に通じとも、生涯身と立つること能は
 ざるべし、
 悪事の、小なりといへども、忽ちあすべからば、其
 一念漸長ざるときは、是非と明し、善惡と審よ
 ころこと、能ざるに至るものあり、人とくして、是

非善惡の心無き者あらざれば常は善は就き惡
と去り是と行ひ非と拒ぎ虚言せん約束は背り
す其快うらんことと求むべし心まことと快き
と意と誠ふをといふ此の如くあるときハ必衆
人の敬愛と得て神の助と蒙り其身ハ大なる幸
福と享るものなり

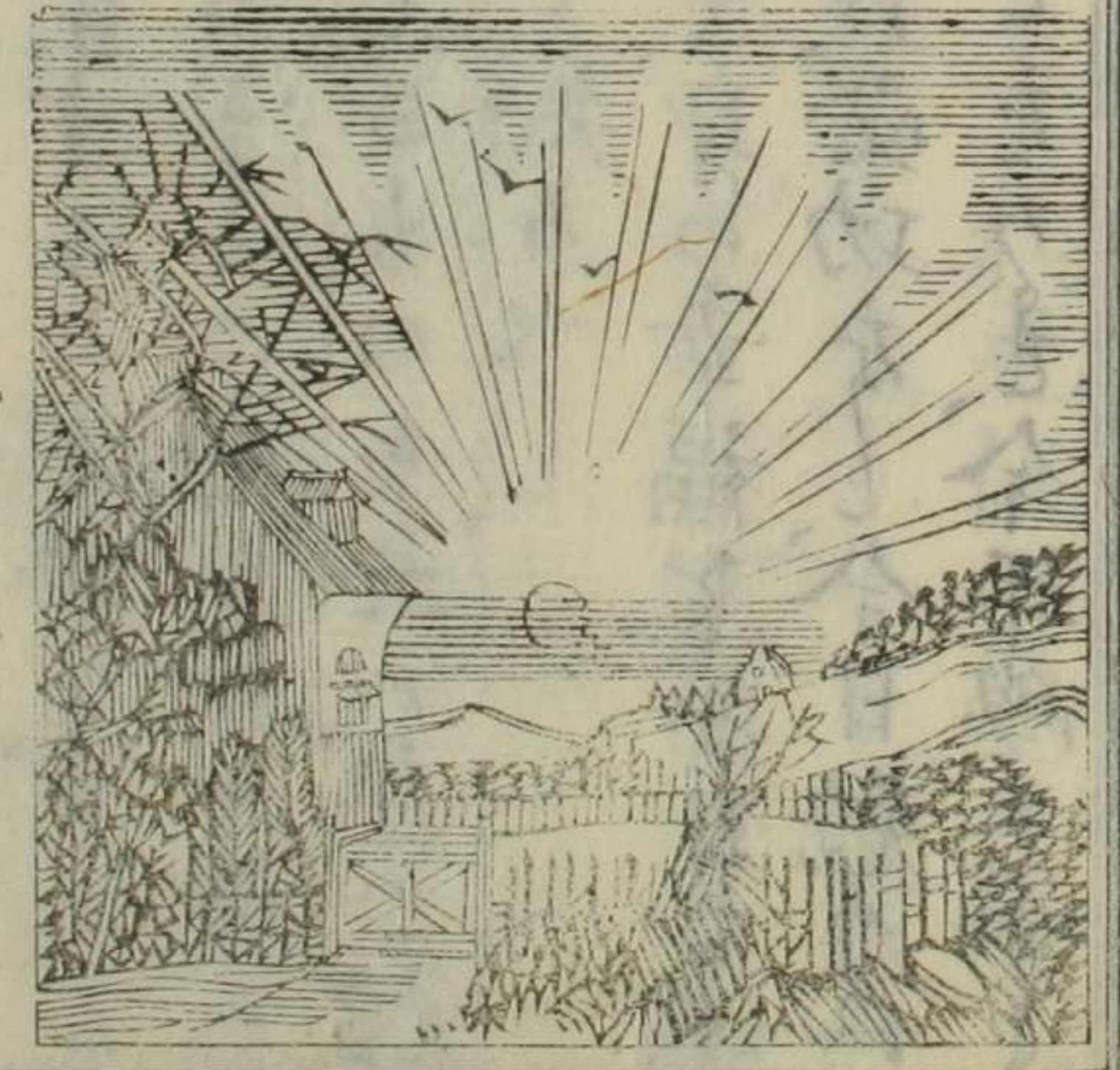
第四

夜將ハ明けんとする時雞先鳴く夜既ハ明くも
ハ鳥雀鳴く
汝ハ寢所ハ在りて雀の鳴くと聞きしや此鳥ハ

夜明けて後ハ眠ること
あらば人とすてハ鳥雀
ハ劣るべからず故ハ鳥
の聲を聞くときハ直ハ
起き出づべし

神ハ晝間人々ハ日光と
與へて其業と成すハ便

をらしむ然るハ夜明けて後まで猶寢所ハ在る
を神の恵と棄るなり故ハ汝等必夜明けぬまハ
直ハ起き出で業ハ就くべしこれ身と立つる



の初なり

幼稚のものに、夙よ起きて、勉強し、無益よ、時と費すことあひまひ、その習性となり、壯年の後業と勉むるふも、倦怠の心と、生ずることなし、

夫神に、必勤むる人よ、何らざまば、妄に物と與へば、勤むまひ、物と與ふるものをなれ、身の勉強へ、幸福と生む、母なりと知るべし、

されば人々、能く勉強し、身の幸福と求むべし、勤むれば、必功あり、惰まれば、必功なし、今日勉むべし、明日ありと云ふことをなれ、今年學むべしと

も、來年ありといふことなり、光陰の矢の如し、一度去りては、復還らず、壯年に至りても、一業一事と、習ひ得ることなく、遂に貧窮困苦に陥るも、皆自招くの禍なり、

第五

二人の童子あり、共よ野よ出で、樹陰に息へり、たの地の野草、灌木、茂ると以て、氣候の夏あることと知る、

一人は、一卷の書を開きて、こゝろを讀み、又一人も、坐して、其文を聽くことと、喜ぶよ似たり、我其聲

と聞りざれども、今其顔色と見て、其心は喜べることと、知まじり。○何よよりて、喜悅の心顔色は形をらや、○微く笑へる、色ありて以て、其喜悅の心ありと、知まじり。人の口と聞りずとも、其笑と含めるは心は喜のありと、告ぐるが如し、顔色も喜怒と人よ知らしむる、徴をまじり、



凡衷は、喜怒哀樂の情あまば、如何よ、これと隠さんとそらとも、顔色の徴は、覆ふべからず、されば、人よ對して、不平の心と、懐かば、親切の遇をべし、何とされば、もし我心よ、毫も怒とふくも又、不平の心あまば、必顔色は、形はら、者をればなり、其他、或は不幸あるとき、或は倦怠せるとき、皆其心と顔色は、形をして、人よ知らしめざることをし、

第六

凡世間よ、あら人よ、貴きも、賤きも、父母より、生ま

れざるいをし、故に父母は、我身の出て來し本を
まふ本と忘るまじきことなり、況てや養育の恩、
山よりも高く、海よりも深くして、幼き時より、晝
夜艱難苦勞して、抱き育てられたるとや、されば
深く其厚恩と思ひて、孝順の心、怠るべからず、
子の父母よつかへて、孝順なるは、神より命じた
る、務をまじとれと忘るべからず、苟不孝の行わ
れば、唯一人の憎と受くるのまをらば、必神の責
と、免まざるものなり、
神を我の性命とさづけ、又我を守りて、幸福と與

ふるものかまども、神に代りて、我を養育せしは、
父母たり、されば父母は、神と同じく、敬ひ尊び、何
事も、逆ふことをまじと、孝順といふ
苟父母の命に、逆ふことあれば、神の責を受け、
禍に罹るよより、父母の誠は、こが身の、及ばざる
所を、補ひ助くる所よし、即神明の命ありと、心
得決して背くべからば、
昔年一人の男子あり、其人とあり、温順よし、て、幼
稚のときより、兩親に、孝行たぐひなきものなり
き、其家固富めるよは、あられども、貧き人と、憐

小島言本卷三
 六音
 み、凡て人よ交るゝ、信實
 ならず、あふ、誰いふとな
 く、此男子と、善人と呼な
 せり、幼き時ハ、近郷の家
 へ、僕たりし、ぐ、夙よ起ま
 て、一事一業も、怠ること
 を、暇あるときハ、手習
 へ、心と盡し、又好て、讀
 書、算術と、學ひしゆ、幾
 ならず、るに、利發の人となき、り、



主人よ、暇と與ふるときハ、已の隨意に、遊ぶこ
 となく、必我家に歸りて、父母の安否と問ひ、終日
 膝下よ居て、事よ従ひ、父母の心と慰ることと、勤
 とせり、
 主家と出で、後の、瑣細なる高と、く、渡世せし
 ぐ、人々、此男子の、正直なること、知て、其物品と、信じ
 け、も、幾も、なく、稍豊よ、な、き、り、
 其後、父と、喪ひて、母の、こと、を、養ひ、たり、が、晝夜、怠を
 く、介抱して、其心よ、違ふことなく、假よ、も、母の、厭
 嫌ふことと、を、なき、り、常よ、善事と、好て、慈愛の、心

禽獸草木まで及びけまば、其家次第に繁榮して、
富有の身となまるとぞ。

宜あり、孝へ、萬善の本といへること、此男子が、生
涯の正直慈惠學ばずして、此に至まると者、皆孝よ
り、生だる所なり。

子の父母に仕へて、孝順なるべきは、天地自然の
道にして、須臾も忘るべからば、然まども、外物の
為よ、心と奪られて、其道と失ふ者も、少かりらざ
れば、常よ其心と守り、自然の道と忘るべからば、
今日、太平の世よ生きて、妻子と與ふ、鼓腹の樂と、

享くること、何の幸り、これよ如く、たや、故に宜む
く、國法と、遵守して、各其業と勤むべし、凡人の子
たるもの、幼時より、親に事あること、此男子の如
く、せよのあらばからば、

第七

此圖せる所は、田舎の富家を、其四面よ、茂林
花木ありて、宅前の平地よ、芝と栽たる、好き景
色の所あり、

汝の、この家の圖と、能く見て、其様と知るべし、
此屋の、數多の棟よ、分まるとり、

屋の上、突き出でた
るも、烟筒なり、これハ
煖室爐の、烟と出たす
ため、設たるなり、
凡て物と見るときハ、
何の用たることと、考
へ又其形で、能く記憶
をべし、物と見るとて
も、其用と考へず、又記
憶せざる人ハ、終身事と識ること、能ざるもの



あり

第八



此圖ハ春日の景色あり、禽鳥ハ、晴空ニ舞ヒ、蜂蝶
も、芳草ニ戯モ、あり、
木ハ、嫩芽と生じ、草ハ、新
葉と發シ、看るとして、緑
をらざるハ、總て天
生の物ハ、春ニ至まハ、美
しき衣裳と、着くらガ如
ク、

人の少年の一生中の春時をれば、才能の種子と、
蒔くときあり、

少年の時、精神も、充滿し、年數も、未遠けき、勉
學ひて、生涯の安樂と、冀望をべし、

少年の時、勉學むるもの、一年の春時、種
子と蒔りざると同しく、生涯智識と開くことな

斯る少年等、縦令富貴の家、生まるとも、遂に
必貧窮とならん、

今世上、富貴ある人と、貧賤なる人とあり、其智

識と、行狀と、見まはし、富貴ある人の、智識も、開け
て、行狀も、亦正し、て、皆少年のとき、能く勉學び
たるものなり、又、貧賤なる人の、智識も、なく、行狀
も、亦正し、からん、これ皆少年のとき、勉學ばざら
ず、なり、

されば、人々、幼少のときより、師の教示、に従事し
て、一身一家と、立つること、と、學ぶべし、
師傳へ、父母は、替りて、兒童と、訓誡し、善道に進む
ことと、教ふるもの、ふて、我身、善教と、學術と、と、
授けて、我資益と、せん、由り、父母、等しく、尊敬

して其恩を忘るべからん

第九

人の萬物の靈なきべ、禽獸蟲魚と異にして、能く
真直は立ちて、歩行は、獸の能く物を見、香と臭き
聲を聞き、食と味ある人と同じと雖、其歩行を
るまゝ立つこと能はず、又聲を發せども、言と
出ださず、語ることと得ん、人の能く言と出ださ
て、意中と語ることと得、又能く諸物と推考して、
物理と解す、是其異なる所なり、
そきこの世界は、全く人の住居を爲す、神の造

り、たるものふて、世界
を、即人の住所なり、
既人の爲す、此世界
と造り、日あり、月あり
て、物を照らし、また其
目と歡むしむるも、
地、上は、芳草と生、下、梢
頭は、美花と開、
人の食物と須むるも
のゆゑ、田野に於て、

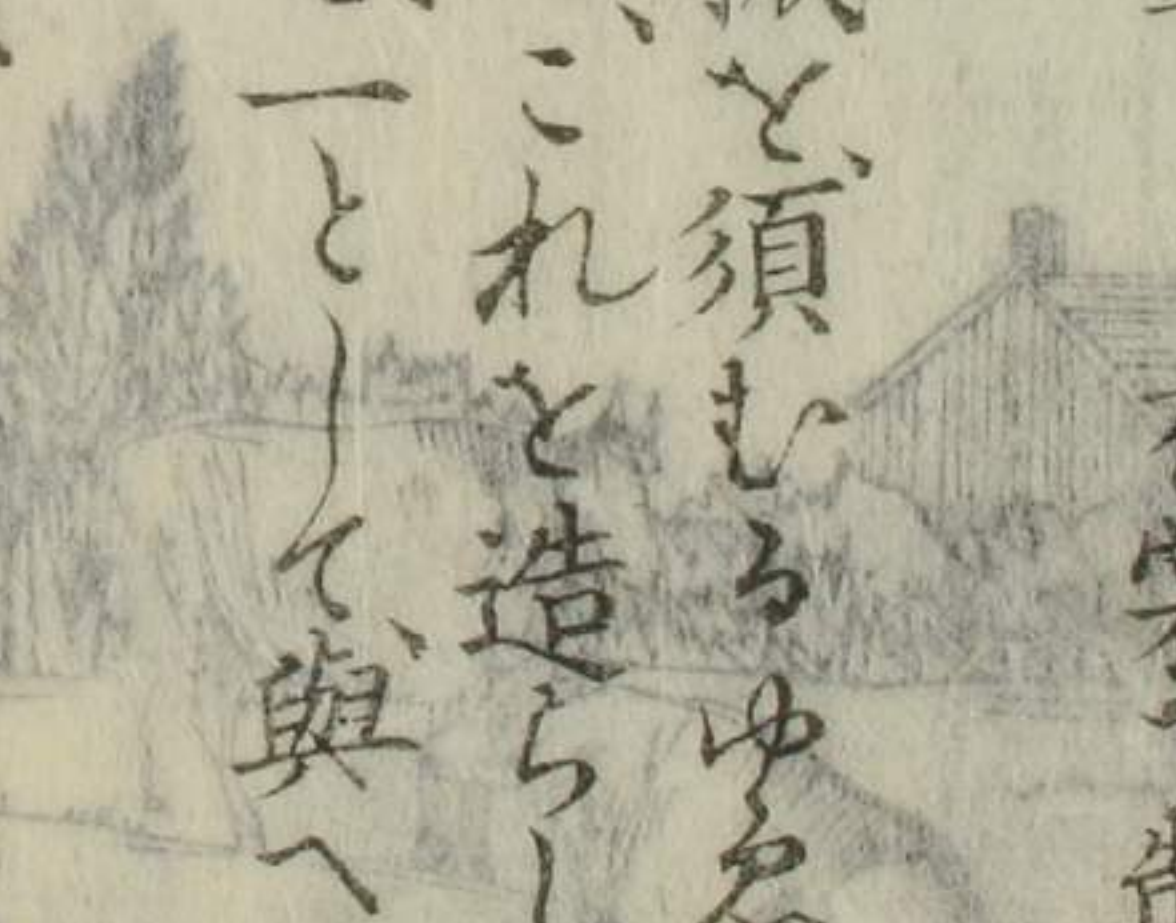


穀物と與へ、山林に於て、鳥獸と與へ、河海に於て、魚類と與ふ、

人の衣服と須むるゆゑ、木綿と蠶と生せしむ、或は野獸の背、長き毛と生じて、衣裳と製ることと得せしむ、

人の家屋と造り、又諸の器械と須むるゆゑ、地中より、銅鉄などをと出だして、これを造らしむ、凡て人の關くべからざる物も、一として、與へざる

ことなき、
人もし、好音と好むとき、鳥、これが為、歌ひ、芳



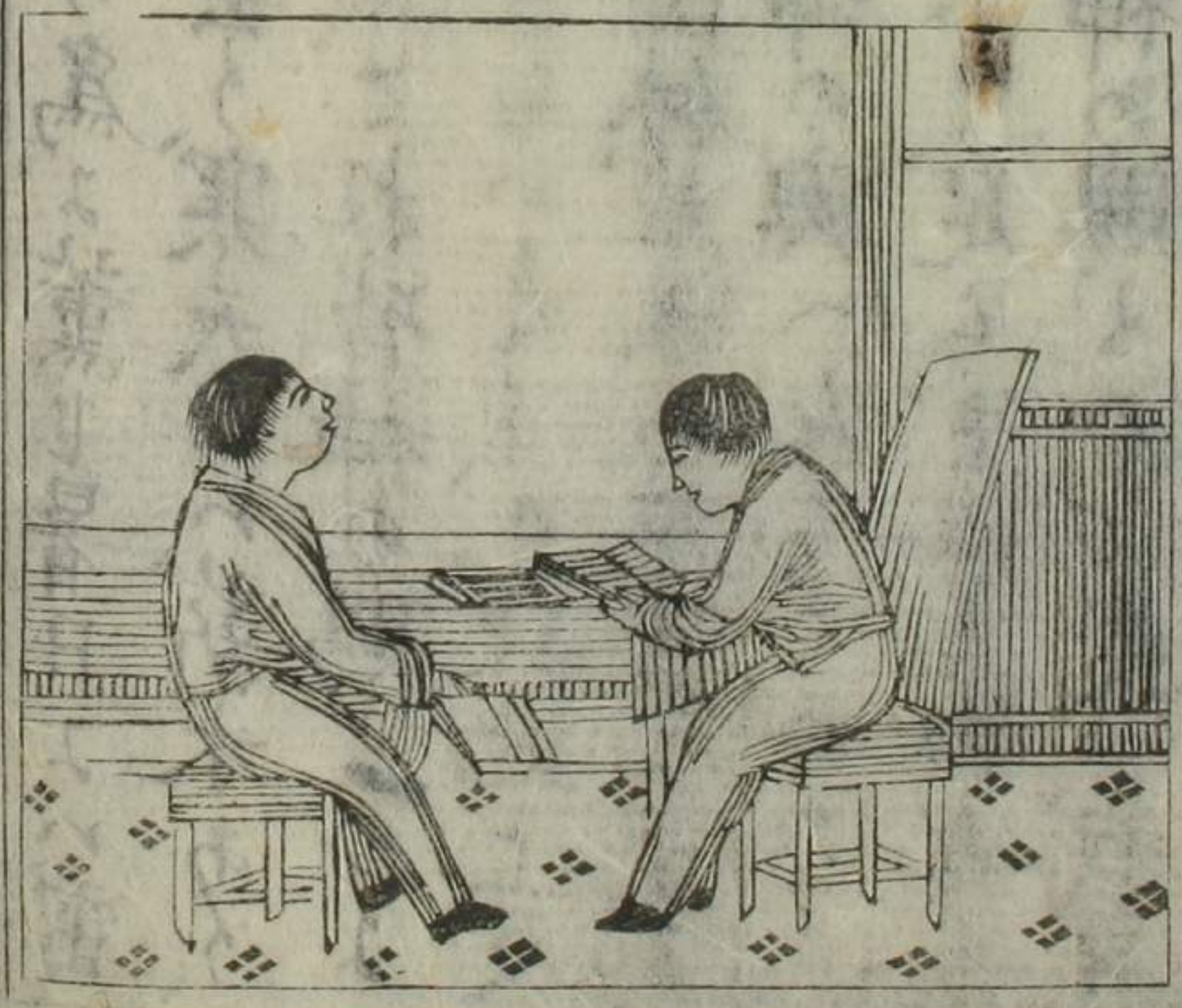
香と好むとき、花、これを為、薰じ、暑日よ、雷雨あり、炎熱、これが為、去り、寒天よ、新木あり、焼きて、以て、煖と取るべし、これ皆神の賜ものなり、所として、これ有らざるはなし、凡此地上及

河海の萬物を、禽獸、蟲魚、山林、草木の花實に至るまで、皆人と養ふが為、神の與へたるものなり、神既に此諸物と、人よ與へて、足らざるものなり、らしむ、故に人々慎みて、神の賜ものと受け、我身の生活と、計るべし、然るども、惡心、惡行の人、此賜ものと受くること

と能くべし、生涯貧窮なれば、其安樂と願はん
よ、必勉めて善と行ふべし、

第十

爰も二人の童子あり、一
人も手と書と持ちて、こ
そと讀めり、此童子も、勉
強して、能く書と讀むと、
見えたり、
其書は、久しく用ゐたる
ものなれども、猶新き物



の如し、因りて、此童子も、怠惰をらべし、又書と
大切なることと、知まり、其書も、好まざり、
彼も、日々學校へ行きて、小學讀本と學び、習ひ得
たる所の章へ、能く諳誦して、忘るることなかり
べし、

今一人の童子も、怠惰のものと見えたり、何如と
となれば、彼が持ちたる書は、悉く汚れ、また所々裂
け破れたる由なり、

此童子は、勞して、書と讀むと雖、忘れたる處數箇
條をれば、通して讀むと、能くば、彼は固書と好

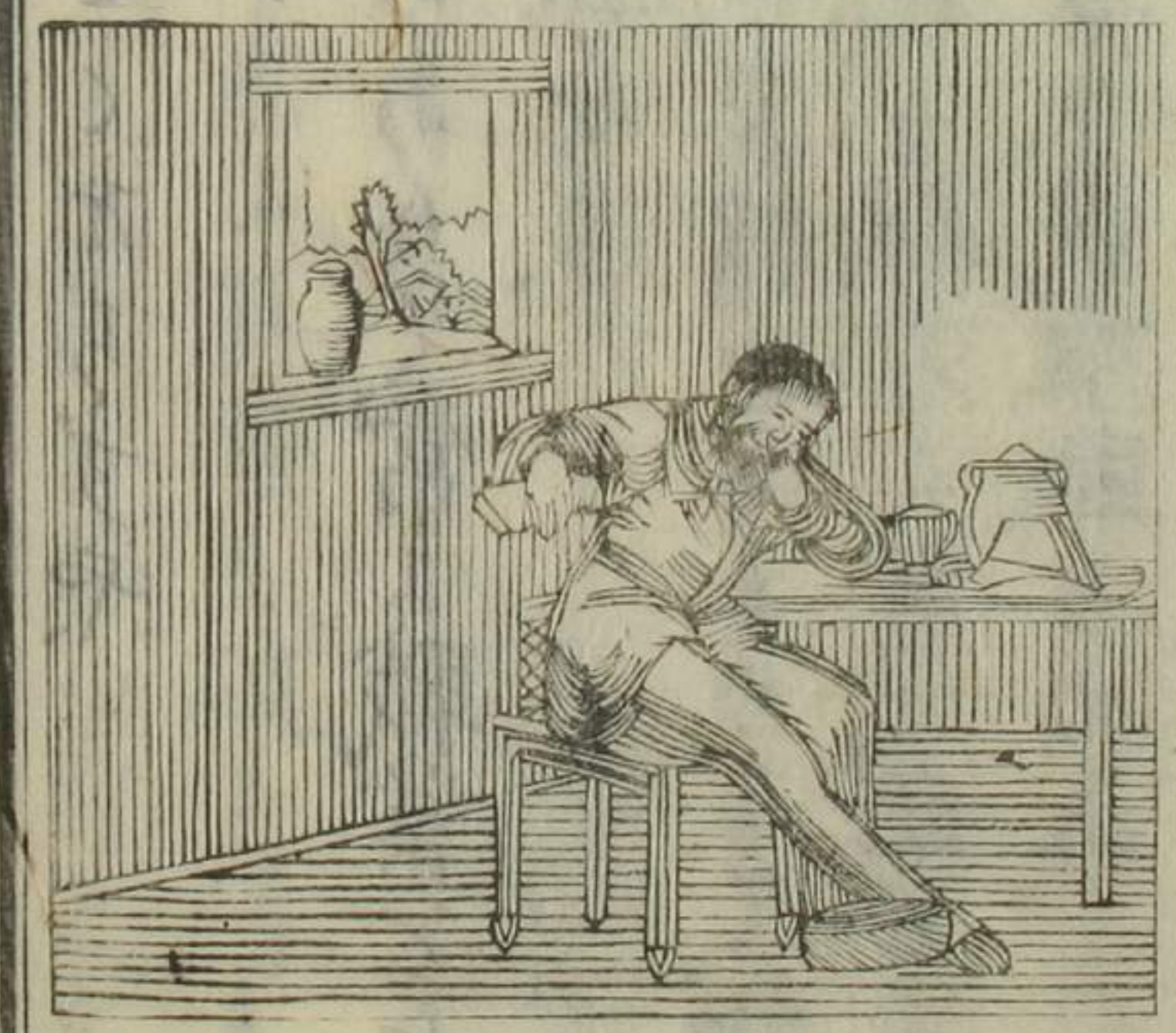
まざるゆゑ、かく學びたる所と多く忘るるなり。
汝ハ彼の顔色と見て、書と好まざることを知たりや。○彼の顔色ハ、怠惰あるを表せり。彼もし、善良よし、能く書と讀むことと、好まば、其顔色斯の如く、見ゆることなり。
善良なる童子ハ、斯る顔色とハ、異よし、必聰敏み見ゆるものなり。
彼ハ能く心と用ゐざるゆゑ、其書も、破き汚もたり。斯る懶惰のものハ、遂に困窮卑賤の身となり。

るべし、尤誠むべきことなり。や、

第十一

昔時一人の怠惰あるものありて、常に職業となさば、今これと、次の圖に示せり。
此ものハ、幼稚のときより、怠惰なるものなり。物事に、勉強をすることなく、已に職たる業を、為せりと能わず、晝ハ徒に坐をり、或唯眠るのみ。
彼壯年に至りても、猶少時の怠惰と、改むること能わず、故に其家貧しく、衣裳も、帽も、甚古びたり。

彼も好き衣裳と好まざるよ、をあらざれども、金をくしく、何如よぞ、好き衣裳と買ふことと得んや、又其業と務めずして、何如よぞ、金と得べけんや、
 彼ハ家よ、妻あり、○其妻も何如なる衣裳と着たりと思ふや、必破きたる衣裳と着たるをるべし、彼も時として、少しの金と得ることあり、されど



此金と以て、衣裳かどと買ふこととなく、即時、其金と無益に費せり、今その状と次、説示をべし。

第十二

此圖ハ、即前の怠惰ものにして、今日、少しの金と得たり、されども、平生酒と好むの癖あり、ゆゑ、己の家よ、歸らんとて、直に酒店へ行きたり、



彼、甚大酒より得たる金の盡るまで、酒と止むることなし、
彼十分の酒と飲むとき、其心狂亂して、暴行と
を、或の路傍に倒きて、前後も知らず、眠ること
あり、
是故、時として、少の金と得ることあれども、
飲酒の為、これと失ひて、衣裳等と求むること
と得る、

此怠惰と飲酒とい、極めて悪事にして、これより
多くの悪業と生ず、凡て人の大飲すまじ、翌日身
體勞も、職業となすこと、能はず、職業とあさむ
まじ、金と得ることなし、金と得ることなけむ、
我日用の品、乏しくして、萬事不自由あり、故に
或悪しき道をも、金と得んことと、願ひ、屢人と
欺く、至るものなり、されば平生戒むべきは、
怠惰と飲酒なり、

第十三

既、前示したる、怠惰人の、飲酒をること、益止
まじ、毫も、職業となすことなし、稀も、職業
となさんと、思ふ心の生ずること、あれども、幼

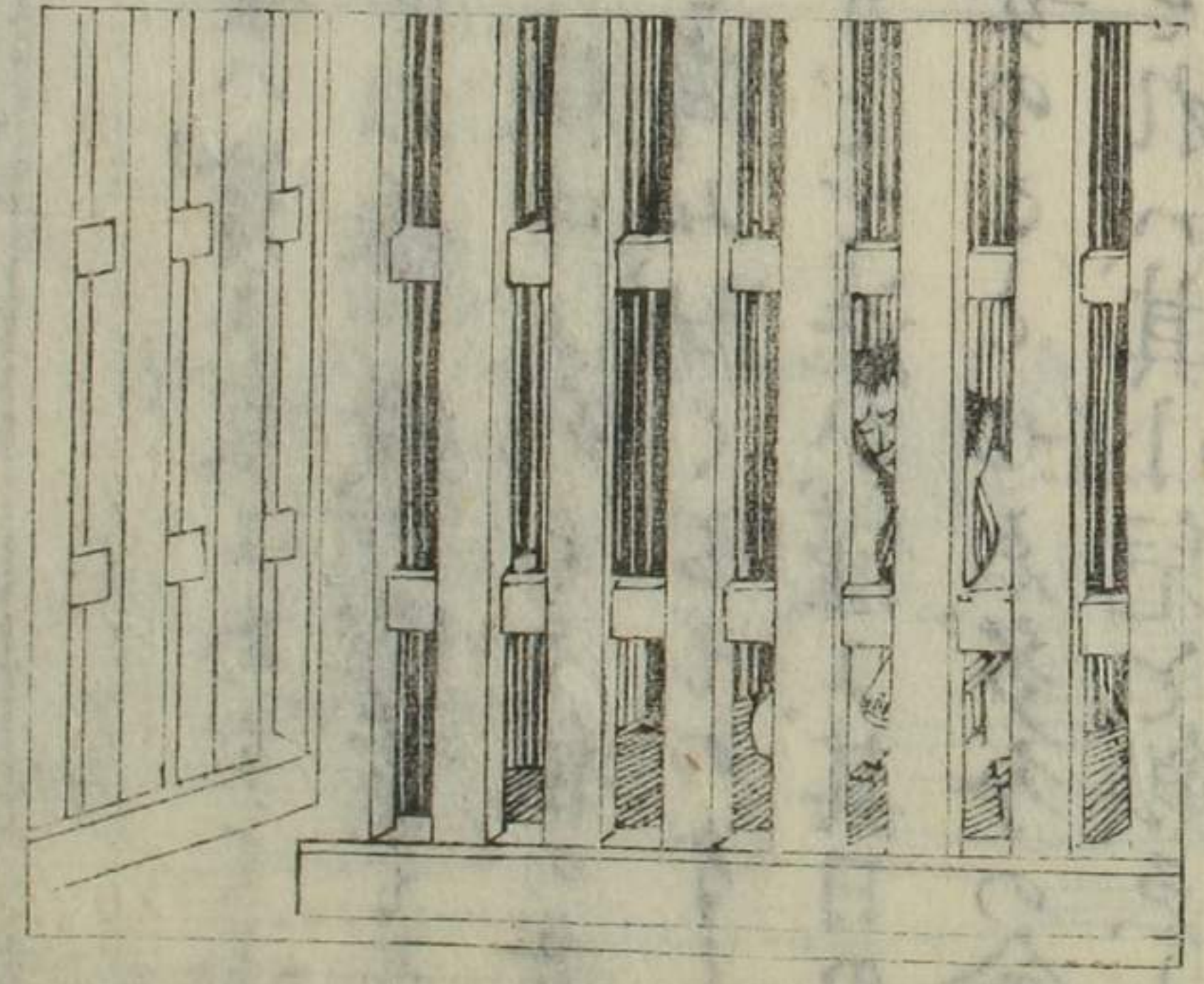
山より懶惰は慣をら身ゆゑ其身とも我心は
従へしむること能はずして日々慢遊と事とし
一錢とも得ることなし

然もとも飲酒の心と止むることと得ず何如
もして金と得て飲酒せんと思ふ一念增長して
終は惡意と生し夜々近傍の家は忍入り金銀と
盜取りて飲酒の料となせり

斯る惡業となりて發露せざること無けむば遂
に捕られて獄中の繋ぐまたり
此人の斯く獄中に入りて藁の上は居ると以て

今日に至りてはま
一滴の酒とも得ること能
むべし只一人暗き處
に坐し絶て心と慰むる
ものなし

既は惡事と犯しなれば
今更悔悟をといへども
身と救ふの術をくして
終は獄中の死せり
家人の妻と小兒あり其妻へ何如して身と養



ひ、又小兒と育つるや、其次第の次條に説示を

第十四

此獄中、死したる人の妻は、貧き家ありて小兒と育てんとすまどもかねて、一錢の貯蓄もななく、又其夫の悪事となりて獄中、死する程の者をれば、村里の人々、これと憐み、助くるものなし。此故に、妻は他人の衣裳などを洗ひ、僅に其日の活計とせども、素より女のことゆゑ、多分の金と得ること能はず、動もすれば其小兒と、餓死し

むることあると如何にとも、をべきやうなく、日夜悲歎して居たりしが、終りの其家も住み難くなりて、小兒と携へ、故郷と立ち去るる、をき酒へ能く人と、昏迷せしめ、亦人と、狂亂せしむ。人の困難をるも、人の悲歎をるも、人の爭論するも、又無益の言を、出だすも、道理なき事と、行



ふも、皆酒のなきしむら、惡業なり、

第十五

此圖ハ、田舎の景色ナリ、
いま畠より、穀物を積み
たる車と挽きて歸り、家
の門へ入らんとす、
汝ハ、此穀物と何ナリと
思ふや、○こそは、小麥か
り、此穀物の日よ乾うと、
穂と打ち落とし、實と、藁と



と別つ、○其のち、磨はて、これを挽き、小麥粉と為

し、各家に貯ふ、
此小麥粉ハ、餛飩、索、麵等と、製をらふ、用あるもの

麥の種類ハ、小麥、裸麥、大麥あり、是等と、稻、豆、稗、粟
等と、悉穀物といふ、穀物の皆動物の食と為して、
身の養と、なるものあり、

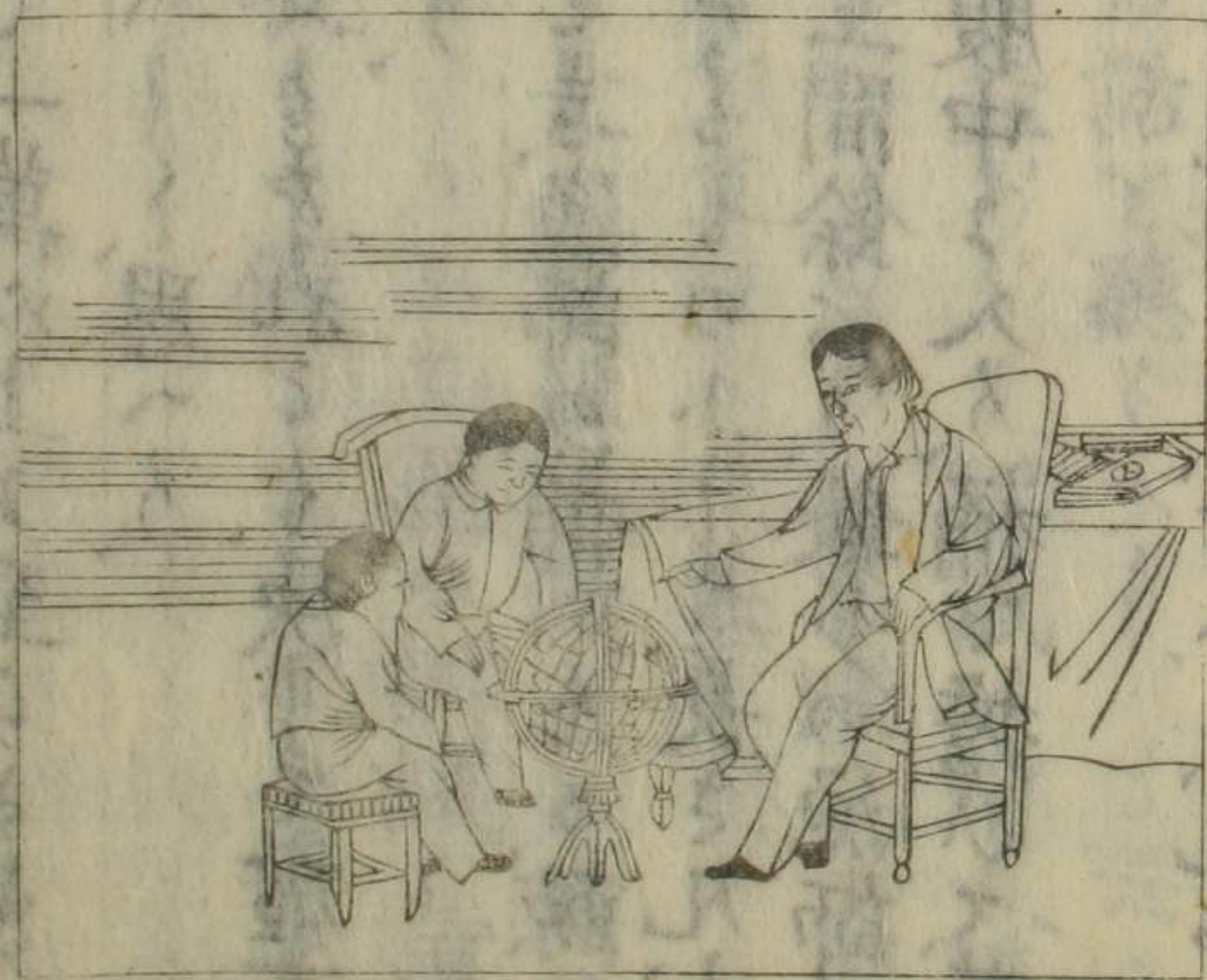
第十六

爰ハ、一人の男あり、其子兄弟二人と、集めて、種々
の珍しき話を聞かしむ、

父曰予前年此世界と一週せしとき、數多の國々
に到り、種々の物と見たり、一度甚しき寒國に到
ることありし、三個月の間、日光と見ることな
く、其間に常に夜なり、此國の住民は、雪又の氷と
以て家と造り、人皆其内に住り、兄弟曰斯
る國は、何處にありや、父曰此國は地球の南極
と北國とよ、近き處にあり、

父曰予其國に於て、一の高山と見たり、其頂上は、
其高くして、甚寒し、頂上は雪にたえて融く
ることなく、人も此山に登るときは、其頂上は、

達せざる前、凍死す。兄弟曰、大陽は、何ゆゑに
其雪と融くさばらや、
又其處は、夏を知らざ
るや、父曰其國は、夏
といへども、我國の寒
中より、尚寒し、又頂上
は、火と噴き出づる、高
山なりて、噴き出づる
烟は、恰も烟筒の烟の
ごとし、予其烟を見し



我が家の烟筒と集めて、一萬以上、至らざるべからざる煙の出でざるべしと思へり、

此父の話の甚大あることをあれども、決して虚言にあらざらん、眞實の話なり、

父又曰、予、大海と渡るとき、漁師の捕へたる鯨を見たり、此鯨、殊に大なるもの、長さ凡十間餘ありて、體の高さ、三間餘あり、數多の漁師、鯨の脇腹に穴と穿ち、腹中に入り、桶と擔ひて、其膏と汲み出たせり、
其他、大なる獸類と、數多見たりと云へり、兄弟の

兒の喜びて、父の話と聽き居たり、
凡て小兒の、謹て、父母の話と聽くべし、
それ父母の言ひ、我身に益ありて、智識と増し、道理に適ふものなれば、子たるもの、柔順よし、
其教に順ふべし、これ身と立つるの基なり、
父母の、我と育つる、年も長し、智慧も、優きをなれば、其教に順ふことをも、もとより、みて、親の訓誡を國の制律と同しく、敬と畏きて、假し、これ不背くべからず、

第十七

一女兒池上、小き舟と浮べたり、其舟の帆ハ、只
 一張なり、女兒ハ、此舟ニ、結付けたる、長き紐と、操
 きり、これ舟の、遠く流るとも、失をざる為なり、
 此女兒の、浮べたる舟ハ、一本の檣あるゆゑ、
 此とスループと云ふ、

凡て舟の檣を、帆と張り、風と受けて、舟と行るも
 のなり、大海ニ、浮ぶる、大船も、同じ理なり、又一男
 兒も、小き舟と、持ちて、これと、池上ニ、浮べんとを、
 此舟ハ、二本の檣あり、これと、スクトネルと云ふ、
 も、三本の檣あるとき、これと、シツプと云ふ、

凡て斯の如き舟と、帆前
 船といふ、帆と張りて、行
 るゆゑなり、帆ハ、麻の厚
 き織物にて、造るなり、
 船中にて、人の、もたらしく
 處と、甲板といふ、○船の
 首と、艦といひ、船の後と、
 舳といひ、右の舷と、面楫といひ、左の舷と、取楫と
 いふ、○船後ニ、突き出で、水中ニ、入りたるもの



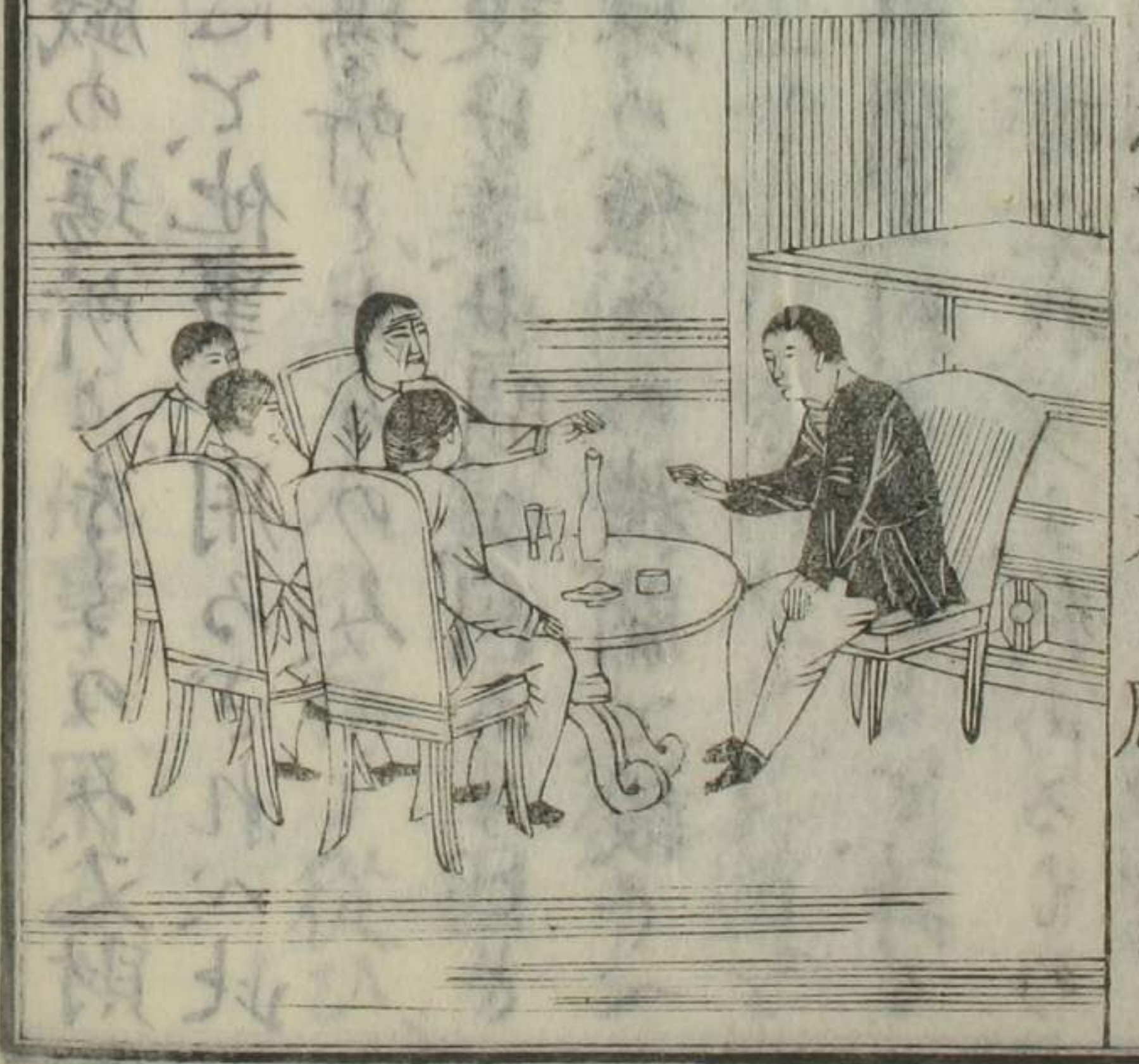
と舵といふ、舵は船の行くべき方角と定むるものなり。

第十八

神は此地球と造り、人民の生活を為し用ふる物とば、皆此地球上に生ぜしむべき人々、其道を盡してこれと求むるときは、何物によっても得ざることなし。然れども人々の善悪と勤怠とにより、因りて物を得ると得ざるとあり、且又人の務に從ひ、物と得ると差等あり。今遊戯のみ、耽りて、少しも心と他事に用ゐざ

れば、此地球は徒に遊戯の場所となるのみ、又財と蓄るのみ、勞して心と他事に用ゐざれば、此地球は、只財と積むの場所となるのみ。もし風車等の機關を設けて、世間に利あることと計るときは、この地球は種々の機關を設くべき場所とされ、人々能く心と用ゐて、世間に利あることと計るべし。世間に利ある時、亦必我身に利あるものを、此の如きとき、此地球と生れたる神慮も、合ふといふべし。

今この圖を畫けり、富人多くの貨幣と出だし
て、衆人を示す、衆人これを見て大に感じたる
所なり、蓋此輩へ斯る
多くの貨幣と得たる
ことなきは、
此富人の嘗て、學校に
入り、多年の間、勉強し
て、百般の學術と覺え、
先き小種々の機關と、
發明し、大に世上に利



益あることと工夫し、今亦其身も大利と得て斯
る富人と、
富人衆人よ、告げて曰、夫この地球に大活物よ、
て、勉むまば、必其報あらざることを、人能く勉
めて、世よ益あることと、工夫をらよ、苦勞をら時
に、其報も必大よして、利と得ること、多きものを
りも、骨折まざる業と爲し、或は只一身に利あ
ることと、勉むれば、其報必小よして、利と得ること
とも、亦少し予も、多年の間、刻苦して、纔に利と得
たれども、今に至りて、猶無益に、時と費やすこと

なく亦無益の財と費やもことをし固自勉て得
たら貨をきべ皆我有にしてこれと費やすも隨
意なりと雖無益の費やをい正道にあらざ若美
服と以て人の驕り又僅の貨幣と得るときは心
の怠と生ずるは實の愚にして且不善あり
貨幣の最要用あるは衣服食糧と購ひ或これと
貧人の與へて其饑餓凍餒と救ふあり
貨幣と得てこれと惜し貯へ世間の用を供へん
又貧人にも與ふることもなく又我富と以て他人
の驕るをい愚にして吝なるものあり人も必

これと憎み神も必これと罰せん
その貨幣の用ある道に由り善きものとなり又
惡きものとなり故に道の當否に従ひ利害とも
は此貨より起るものあり
故に怠惰にして貧賤なるは實に恥づべきこと
なれども貨のことで愛着するも害の根原なり人
々出精して其業を勉め其富を計るべし既富
めるに至らばこれと世間の用を供へて貧人と
救ふと第一とすべし

第十九

平生断えず、業と勉むるは、樂しうらべ、又断えず、
遊戯と、事とをもち、樂しからば、故に、就業の時間
を、出精して、業と勵む、然る後、出遊する時、そ
の樂と、覺ゆるものなり、

就業中、出精せざるときは、其心、耻と懷きて、
快からば、行の善良あるは、心の快きと得る良法
なり、怠惰あるもの、心の快きことをし、何とな
まば、其行狀の不善なるゆゑ、取づる所あるは、
一、事と成さんとせば、必其心と放つことをなく、一

時、これと爲べし、或、事業多くして、力も餘ること
ありとも、怠慢あるは、これと勉むまば、必其効あ
りて、能く成就す、故に、勉むまば、何事も易く、勉め
ざれば、何事も難し、

書と讀まんとき、如何に難き所にて
も、これと止めば、勉強して得る所あり、あらざ
まば、他事と爲ることなれ、縦令力も餘る箇條も
ても、餘念なく、勉強するときは、これと、理會せら
るるものなり、
苦をひまば、樂あり、勉強の後、非ざれば、遊歩

も、樂あらば故に書と讀む時に其文と理解して
後、遊歩をべし、業とふるとき、其業と成就し
たる後、休息をべし、然るとき、心よ恥づること
とふきと以て、遊歩も身の攝生となるものを、
抑、恥も人心よ於て感動の大なるものあり、恥と
知るとき、人々、怠慢放肆なることをなし、平生事
と行ひ、業と勉むるよ、方りて、我心よ、恥づること
なりらんことと、欲するの、身と守るの、要務なり、
今業と勉めて、就らば、書と學びて、通せざるも、大
なる恥なり、も、この、恥と知りて、出精勉強する

とき、業の就らざることなく、書の通せざること
となし、
人の、世よ生れ來し、天工と助け、國用と資する
ものなるよ、何等の業も、勉めば、國家の益とをさ
ざるもの、自禍と招きて、困窮に陥るべし、此等
も、天よ恥ぢ、人よ恥ぢ、又我心よ恥づること大なる
神の、妄よ、幸福と與へば、人として、自これと、取ら
しむるものあれば、唯耻と知りて、能く勉強する
者の、幸福と得、耻と知らざるもの、幸福と得

るごと、能へざるものと、知るべし、

第二十

禮の教化の本よりして、人民の惡念と止め善心と、開き人道と、離ましめざるものふまは、須臾も違ふべからざるものなり、

人性の本善を有ると以て、辭讓の心と有せざるものなり、然まども、人欲の私より由りて、本然の性と失ひ、遂に放肆遊惰のものとならるなり、
人々、幼推の時より、人欲の私より克ちて、本然の性より復るべし、父母より事ふるときは、孝養ふるべく、

長上より事ふるときは、恭順あるべし、兄弟の友愛

も、朋友の信義も、親族の協和も、皆禮より生ずるものゆゑ、禮の身と立るとの本をりし、知るべし、
貪欲の念と肆よりることなれば、忿怒の心と、縱よすることなれば、貪欲の念より忿怒の心あるとき、
事の行ひ、業と務むるとき、當りて、正路を得ること、能はざるものなり、

そを、貪欲の私情の惑よりして、此念と肆よるとき、
き、遂に殘暴の行となれば、至る又忿怒を、一時の狂疾よりして、此心と抑へざるるときは、遂に争鬪

の端と開くに至る、必竟ハ皆幼稚のときより、辭讓の心と、失ふよおまきり、古語よ謙ハ益と、受く滿ハ損と招くといへり、終日業と務むまふ、心中よ爽快と覺え、今日遊怠ふれば、翌日繁忙の愁あり、古語よまふ終身道と讓るとも、百歩と枉げず、終身畔と讓るとも、一段と失ふんといへり、是禮讓の得ありて、損なきと諭せらるものなり、

即第二十一

昔一人の童子有り、天性至孝よりして、善く其母の

事へ毫も其命よ違ふことをし、母事と命する毎よ直よ立ちてこれと行ひ、常よ怠らん、母嘗て紡絲と繰りて、絲環よ紆ふことあり、其子よ命じて、紡絲と手よ掛けしむ、童子ハ絲と紆ふるの間過ちて、これと紛亂し、解けざるゆゑ急よこれと解うんとをりよ、却りて、緒と失へり、童子既よして、一の緒と求め得たるゆゑよ、頻よこれと引けば、益固結して、復解くべからざるに至る因りて、更よ狼狽して、一線と斷せり、母これと止めて曰、汝過まり、此の如くする時ハ、適よ其



人世の業と務むるは、猶亂まらざる絲と理むるが
如し、是は監に宜しく、汝の終身と計るべし、世は
處し事に臨みて、苟私欲忿怒を惑ひ己の血氣と

紛亂と、益をのみ暫、汝が
心と静め、思て平にして、
正き緒と求むべし、既に
正き緒と得まば、亂れと
る絲、は自解くるものか
りと、

母又童子よ、告げて曰、夫

抑へざれば、縱令苦心焦思して、其力と盡をととも
徒ら勞して、功なきのみと、

小學讀本卷之三終

明治十六年六月六日翻刻御届

東京府平民

翻刻出版人

柳河梅次郎

日本橋區本町二丁目

十番地

